文芸プラザ

短編小説

遺物（上）

今井 隆

朝一番の普通列車に乗った一人の女子高生が、乗降口に立って流れる景色を眺めていた。梅雨明け宣言から、一週間ほど過ぎている。あいにく季節にはない霧雨が車窓に流れていた。飛騨川に滑り落ちている急な山肌を、淡い靄が固まりとなって上っていく。

列車が飛騨川にかかる鉄橋にさしかかると、女子高生はふと川面を見た。瀬の白さとは異質の青っぽいものに目が止まったので思わず凝視した。釣り人が何かを探しているかと思ったが動く気配はない。足がだらしなくのびている。彼女は、人が死んでいるのだと確信した。それを確かめようと、デッキを見回したが誰もいなかった。

彼女は、直ぐに携帯電話を取り出して警察に連絡を取った。

発見から一五分後に救急車が駆けつける。現場は国道四十一号線にかかる橋の真下だった。救急隊員は、橋の上から川面を覗き込み思わず足をすくめた。三十メートルはあろうかと思われる高さである。存在を誇示するように、青シャツの姿が確認された。道なき急斜面を降りていって側に行った隊員は、目を背けた。頭を激しく岩に打ちつけたらしかった。男はすでに冷たくなっていた。

その直後に、管轄である高山警察署の警官が現場に駆けつけた。

この辺りはV字型に削られた典型的な渓谷の地形で、近くには民家もない。JR高山線と国道四十一号線が、交差しながら飛騨川沿いに延びている。

埃がこびりついた橋の欄干に、手でこすったような跡がいくつか発見された。遺体は、身元を明かすものを持っていなかった。遺書も見つからなかった。岩の上に付着した血痕から鮮血反応が出たことや、情況から判断して自殺だと推定された。警官の一人が、「何でまた死ぬのかね」と呟いて空を見た。朝の靄もすっかりと上がって、暑くなりそうな一日であった。

数台の車が近くの待避場に止まり、何人かが眼下の飛騨川を見て騒いでいたが、現場検証が終わるといつものように車の騒音と流れの音だけになった。

谷に沿って延びている林道で男のものと思われる車が発見された。国道から三百メートルほど入ったところである。男はここに車を止め、死に場所を求めて歩いたものと想定された。司法解剖の結果、死後数時間が経過していることも明らかになった。

北小路律子は、いつも朝六時半頃に起きる。その日、目覚し時計の電池切れが近いらしく、聞きなれた「エリーゼのために」のメロディーが途切れながら流れてきた。電池の買い置きがなくなっていたことに気づき、夫の真一に買ってくるように頼もうと思った。

律子の夫である北小路真一とは、寝室を別にしている。書斎で寝た方が創作には都合が良い、と真一が言い出してから二年ほどになる。この春に一人っ子の泰弘が京都で就職し、具のないサンドイッチのように二人は乾いた関係になっている。

律子と真一は、最終的には恋愛結婚の末に結ばれた。真一が建設会社回りをしていたとき、高山市にある建設会社の事務員として働いていたのが律子であった。その会社の社長の娘だと分かったのは、付合い出してしばらくしてからである。真一は当時、飛騨地方では中堅の建設資材会社でセールスマンとして働いていた。ゆくゆくは父親の後継者として、社長の座に就く予定であった。建設会社と資材会社の結びつきだから仕事の上でも好都合だ、という律子の両親の希望が、結婚を迷っていた律子の背中を押したのだった。

真一と結婚してからの長い間、律子は生活の不安を感じたことがなかった。しかし、ここ数年、真一の口から出るため息の数が増えていき、それとはなしに会社の危機を感じ取るようになっていた。日本経済は、構造的な不況に見舞われるようになって久しい。莫大な赤字国債の解消を視野に入れた構造改革が二〇〇一年に始まり、国民の間には失業や社会不安の増大など閉塞感が強まっていった。

もっとも痛みを強いられたのは、建設業界であった。工事費のあからさまな減少は、業界に絶望をもたらしていた。もちろん、真一の会社がその渦に巻き込まれないはずがなかった。真一と律子だけという小さな家族のわずかな団欒をさえ奪おうとしていた。

律子が重い気分でまな板を叩いていたときに、時計が七時を知らせた。真一の目覚ましは、朝七時にかかる。いつもは階下の律子のところにも、リンリンと乾いた金属音が聞こえてくる。ところがその日、真一の目覚ましの音が聞こえない。律子は階段の下から呼んでみたが、真一の起きてくる気配がなかった。二階の書斎に真一のベッドが置いてあった。律子が書斎のドアを開けると、ベッドは空になっていた。

時として、そういうことがあった。野鳥につく朝露を見たり、明け方の星を眺めたり、近くを通る飛騨古道を散歩するために、年に何度かは早起きをした。それも夏季など、三時頃には家を出た。律子には、夫の考えていることが分からないことがあったが、真一の気まぐれな早起きもその一つである。

春にはスミレやオオイヌノフグリなどを摘んで持ち帰り、知らない間に小さな花瓶にさしていることもあったし、秋にはどこで取ってきたものか楓の落ち葉が数枚、ナイロン袋に入ってそこらに置いてあったりした。そんな繊細な心を持っているのかと思えば、身の回りのことは結構ルーズで、新聞の切り抜きや雑誌などが床に散乱していることもある。酷いときにはシャツが、まるで洗濯かごをひっくり返したように積み重なっていた。

律子は、それで陰と陽のバランスが取れているのかしらと、何度言っても直らない夫に呆れ、結婚当初の苦言もすっかりと影をひそめている。それに完璧な人間を求めることは間違っている。夫はざっくばらんな性格の遺伝子を引き継いでいるに違いない、夫の性癖は生きていく上で枝葉末節な部分に相違ないことなのだと思うようにしている。そう考えれば腹も立たない。

書斎から引き返すときに、律子はいつも散らばっている本の類が積まれていることに気づいた。印字した原稿や新聞の切り抜きも見当たらない。年に何回かは、思い出したように身の回りのものを片づけることがあった。律子はふっと笑い、夫は例のようにまた散歩に出かけたのだと思った。ところが出勤時間である七時半近くになっても、真一の姿はなかった。律子は小首をかしげた。

電話が鳴ったのは、午前九時頃であった。律子は高山署からと聞いて、とっさに三日前に無くした財布に運転免許証が入っていたので、誰かが拾って警察に連絡してくれたのだと思った。

「北小路真一さんの奥さんですか」という声で「はい」と応えると「落ち着いて聞いてください」と電話の向こうが言った。息子の泰弘が事故でも起こしたのかという思いがよぎった。

「真一さんと思われる男性が遺体で見つかりました。直ぐに高山署まで来ていただけませんか」

「えっ……」

律子は一瞬、心臓の辺りが熱くなるのを感じた。〈うそでしょう〉と、心がつぶやく。自殺とかってに告げられても、律子には思い当たる節がない。経営上の問題は確かにあったが、律子の中で自殺と結びつかない。律子は取るものも取りあえず、ハンドルを握った。

間違いであって欲しいと律子は思ったが、時として自分は高山市内のスーパーに買い物に行こうとしているのではないかという思いがよぎったりもした。そうかと思えば、真一と初めてのデートのときの満開の桜をバックにした一枚の写真が浮かんでは消えた。

高山署にあった遺体の顔面は潰れていて、律子は思わず息をのみこんだ。確かに真一が着ていた青色のシャツを身につけてはいたが別人に思えた。いや、そう思いたかった。立ち眩みが起きた時のように、その場にしゃがみこんだ。

しかし律子は、夫の死体に向かい合っているにもかかわらず、自分の気持ちが意外にも冷静なことに驚いた。

「顔以外に確認できる特徴はありませんか」と、警官が言った。律子には直ぐに思い浮かばない。それでも妻なんですか、と警官が思っているのではないかと、気が焦った。夫のことをどれほど知っていたのだと、誰かが遠いところから話しかけているようにも思えた。

ふと、律子はへその下に二つのほくろが並んでいるのを思い出して警官に告げた。遺体から確かに二つのほくろが確認された。ごく限られたものしか知らない場所である。律子は突然夫との情事を思い浮かべた。こんな時に、と思った。

それからは自殺の原因があれこれと頭の中を巡った。高山署まで来る車中で考えていたことが現れては消え、消えては現れた。会社の経営で、夫が苦しんでいたことは確かだと思う。この数ヶ月、「社長の給料が社員よりも少ない」などと呟いていたし、実際に律子の手に渡る現金は二十万円程度のこともあった。お金で人が死ねるのだろうかと、律子は考えた。

警察での簡単な事情聴取の後、律子は真一の遺体を後部座席に乗せて家に帰った。夫が、「ああー、良く寝た」などと言って、起き上がってくるのではないかという気が途中で何度かした。家に着く頃には、遺体は微かな異臭を放つようになっていた。

それからというもの隣組との打ち合わせ、親族縁者や会社関係者への葬儀の連絡などと、律子は悲しむ暇がないほど忙殺された。京都にいる息子の泰弘には、高山署から連絡しておいた。

律子は、ときとして自殺者の妻という好奇の目にもさらされた。喉から突き上げるような深い悲しみに見回れたのは、葬儀が終わった夜であった。夜遅くまでつき添っていた息子の泰弘が寝てしまうと、律子は居たたまれなくなって外に出た。あれほど鳴いていたカエルの鳴き声が、静かになっていることにふと気がついた。雄が精の強さをアピールするために鳴いて雌を求めるのだと、何かで読んだことがある。

発情の期間が終わってしまうと、彼らの世界では鳴くことはむしろ危険な行為なのであろうか。カエルの鳴き声が下火になると、主役が代わったように平家蛍が舞うようになる。たった一ヶ月ほどで自然はかくも変化するものなのか、と律子は思った。真一と結婚して、まもなく二十年を迎えるはずであった。それなりの祝いの準備も考えていたのにこの時期にと恨む気持ちにもなり、二十年の節目を乗り越えればまた太い絆が縄をなうように延びていくに違いなかったのにという気になった。しかし、現実にその夫はいない。

蛍の輝きが急に弱くなった。見上げると雲の間から満月が覗いている。重そうな雲が、西から東にゆっくりと流れていく。若いときに真一と並んでこんな景色を見たような気がした。確か、幼かった泰弘がそばにいた。

「あなた。……あなた」と、律子は月に向かって声を出した。

軒先辺りを飛ぶ蛍の光が、おぼろになったり輝いたりして律子の目に映った。眼前に広がる棚田から、ふいの風に煽られた稲の葉のこすれる音が微かに聞こえてきた。

死んだ後に、どれだけ大切な人であったかが分かるという。夫婦にとって大きな問題、例えば不倫騒ぎ、子どもの非行や大病なども なく過ぎてきた。少なくとも律子にはそう思える。長年の疲れが夫に溜まっていたはずがない。最近でこそ、経営上の危機が惹起してはいるが、今まで小さいとはいえ危機を乗り切ってきた。悲しいというよりは、なぜという疑問の方が律子のなかで膨らんでいった。先ほどあんなに出ていた涙は、すでに乾いている。

半月が経った頃に、会社の経営権を形の上では専務になっている真一の弟に譲ることが決まった。律子はかねがね経営の手腕では義弟の方が勝っていると感じていたので、安心した面もある。夫は世間並みの生命保険に入っており、その三分の一を義弟に渡そうと思った。

いつになく暑い季節が巡ってきた。そこまで来ている八月で、律子は四十二歳になる。真一の誕生日は、律子より一日遅かった。五十歳になる直ぐ手前で逝ってしまった。

律子の誕生日が少し過ぎた頃、仲の良い数人の女友達が、一人じゃ寂しいだろうからと簡単な食事会を開いてくれた。酒が入るうちに、S出版社が公募した新人賞の話になった。同じ町に住む二十歳の女性が、その佳作に入賞したという。律子もそのことは新聞で読んで知っていた。

律子は、「主人も趣味で小説を書いていましたよ。でも、ものにはならなかったんですが……」と言って微かに笑うと直ぐに、「知らなかったわ」とか「へぇー、すごいね」などといった声が上がった。その後、場が一瞬静かになった。饒舌を誇ったように感じられて、律子は不用意に言ってしまったことを後悔した。しかし、未亡人になった友人から、肩が軽くなって楽しく生きているなどと聞かされて不意に気分が楽になった。その日から、律子は少しずつ元気になっていった。

（あすに続く）

いまい・たかし　昭和30年、岐阜県益田郡（現下呂市）萩原町に生まれる。農林水産省に勤務するかたわら、30歳ぐらいから小説、詩、ルポなどを書き始める。文芸同人誌「火夢」主宰。短編で「岐阜市文芸祭賞」受賞、平成12年に水稲新品種「龍の瞳」を発見して育成。19、20年と、お米の食味コンクールで日本一に輝く。現在は、（有）龍の瞳の代表を務めながら、森の再生などを夢見る。

文芸プラザ